

令和4年度

第3号

令和4年 1月発行

学校運営協議会だより

令和4年度 第3回学校運営協議会が12月16日（金）に開催されました。第3回学校運営協議会の内容をお伝えします。

1 開会の挨拶（長谷川委員長）

お忙しい中、足を運んでいただきありがとうございます。12月もあと2週間となりました。今日から内金崎さんが参加となります。次第にそって進めていきますのでよろしくお願いします。

内金崎委員

立川市社会福祉協議会からきました内金崎と申します。今年度から浅見と内金崎の2名体制で6地区、一番町・上砂町・西砂町の地域福祉コーディネーターとして配属になっています。浅見が産休に入り今年度限り1名となってしまうかもしれませんが頑張っていきますのでよろしくお願いします。

2 校長挨拶

ずいぶんと寒くなってきて今朝校庭には霜がおりていました。学校の新型コロナウイルスの感染状況は、多少感染者はいるものの爆発的に増えてはいません。他校では先生方もお休みされて大変だと聞きますが、おかげさまで終業式まであと一週間、乗り切れそうです。二学期も順調に教育活動を行うことができました。いよいよ来年度の教育課程に向けてそれぞれが動き出し、ようやく全貌が見えてきたところです。今日はこの学校運営協議会の大きな柱になっています来年度の教育課程を作っていくための資料をご提供しながら皆様のご意見を頂けたらなと思っていますのでどうぞよろしくお願いします。

3 魅力ある教育課程を目指す取組について

・学力向上、授業改善の推進について

年3回東京ベーシックドリルを行っている。前の学年の授業内容がどの程度身についたか子供たちに効果検証をはかっている。二学期までの結果、3年生から6年生までについては平均で6ポイント上昇。ただ、2年生についてはポイントが下がっているという結果が出ました。

立川市民科を題材にしながら校内研究を進めています。体験的な活動なので今まで学んだことを活用しながら進めていかなければいけません。例えば国語で習った文章を活用しながらお手紙を書く、地域の方々に質問をする、まとめるといったようなこと。算数で習ったグラフや表を元にしながら立川市の人口の推移がどのようになってきたのかなど、教科横断的な指導ができてきたということは非常に効果がありました。課題としては授業改善推進プランを毎年作成しているが全ての教員に実効性のあるものになっているのかどうか検証ができないかなというところが課題として挙げられる。

平山委員

授業改善の推進のところで低学年の学習内容の定着に課題がみられるということですが、バックグラウンドにあたる課題になる要因は何でしょうか。

福原校長

唯一、3年生以上と2年生以下で違うところは、習熟度別の授業を行っているかないかです。算数についてですが、3年生以上は習熟度別の授業を実施しています。3クラスの学年は5クラスに分けて指導を。2年生以下はそれぞれのクラスで算数を指導している。それしか要因としては思い浮かばない。つまり、習熟度をやっていけば効果が出ると見て取れます。

平山委員

担任の先生方は課題があると思われる内容について着手できることはあるのか。

福原校長

来年度から全学年習熟度別に授業を行っていくことが一番良い方法ではある。

福永委員

今までの1年間の経験の中では今おっしゃったような習熟度のクラス編成を2年生でも行ったほうが良いのではというの各論になるかもしれない。この資料を分析して教職員の考えを中心に据えていかなければならないのではと思う。それに対して我々がどう思うのかという進め方のほうが良いのではないか。

平山委員

取り組み内容の教科担任制の検証はどうなっているのでしょうか。

福原校長

教科担任制はしっかり取り組みました。前年度と比べて結果どうだったかというのは今の段階で何とも言えないのですが、先生方の感触としてはどうでしょうか。

市村主幹教諭

教科担任制について、6年生では体育を週3時間、社会を週3時間、英語週2時間と道徳を週1時間の担当に分かれている。私は体育の専門ではないが、高学年の体育を長年教えているので経験値があるのでいろんなフィードバックができる。質は上がるかなと思う。社会や英語、道徳の授業準備をしなくてよいのでその分体育の教材準備ができるメリットはある。ただ、授業を行っていない教科の指導能力が下がってしまうのではないかという不安もある。低学年では担任の先生とのつながりの中で授業が行われ、子供たちは担任の先生がいて安心して授業が受けられるという話も聞くので、教科担任制良いのか悪いのかはわからないが、授業の準備や質についていえばメリットが、授業を行っていない教科については自分の資質が上がっていかないデメリットの両面があると思っている

平山委員

それは先生方の意見であって、子供たちにとっては、メリットのほうが大きいととらえていいのか。

市村主幹教諭

そうだと思いますが、経験年数のある教員の教科担任制のメリットは多分にあると思うが、経験年数の浅い教員にとっては大変なのではないかと思う。

齋藤副校長

学校評価のアンケートでは保護者約90%の肯定的な評価となっています。子供のほうも約90%。色々な先生から教わることは子供たちにとってもより良いものととらえているようだと言アンケートからも見て取れます。ただ、1年目の教員が、ということもあるので学校でもサポートしながらになってくると思います。

福永委員

教科担任制の科目はどうなっているのか。

齋藤副校長

6年生 社会、体育、外国語・道徳。

5年生 社会、体育、外国語・書写

図工、音楽、理科は専科、家庭科は講師が担当している。

福永委員

主要３科目はどうなっているのか

齋藤副校長先生

算数は習熟度別指導を行っている。３クラスの場合は５展開、２クラスの学年は３展開に分かれている。

福原校長

課題に上がるのは、運営上の問題で中学校であれば専門なので教科の時間が多くても少なくても問題ないが、小学校は学級担任文化があるので一律で教員の持ち時数をそろえなければいけない運営上の課題がある。今年は持ち時数をそろえることができたが、来年もできるかといったら人の問題、人数の問題があるので同じ教科でできるかは明言できないデメリットはある。いずれにしても教科担任制は子供たちにとっては効果があることなので、来年度も進めていけるところは進めていきたい。

長谷川委員長

学校公開に何回か行かせてもらって、算数習熟度の授業も見させてもらったが、子供にとっても授業内容の密度が濃くて集中している時間が長くて、頭の中に入っている印象を受けた。人数が少ない分細かく授業の説明をしているようなので子供の取り組みもしっかりしている気がしました。大勢でやっている後ろを向いたり、気が散ったりしている子供がたくさんいたようだが、少人数だとあまり感じなかった。それなりにメリットがあるのかなと思う。低学年で少人数に分けるときの応力の判断は非常に難しいと思う。時期を見て判断していかないと急に伸びる子もいるので、低学年で少人数にしたほうが良いのか、様子を見たほうが良いのか先生方の判断でやっていったほうが良いと思う。

福原校長

習熟度指導を行うことで子供の実態を踏まえた指導が可能になってくると考えている。

４ 次年度の教育活動に対する提言案について

・提言案の全体像

福原校長

一つは先ほどお話ししたように体験的な活動から子供たちはなぜ学ばなければならないのかとか、こういうことに習ったことが使えるのかとかそういう実感というか喜びというか、そういうものを味わわせることがとても大切なのかなと思っている。例えば学習意欲を高める取り組み。もう一つは算数の習熟度別を全学年で行う。この二つを来年度の学力向上の方針としてカリキュラムを組んだらどうでしょうかという提言案をとして考えてみてはどうか。

福永委員

学習意欲を高める取り組みは何を目指すのか、何をやって目指すのかがよくわからない。逆に我々が提案するのだから、算数の習熟度別は細かいところがポイント的に入っているのでポイントを決めて〇〇を強化すると入れたほうが見る側はわかりやすいと思う。

齋藤副校長

提言を受けて細部については教育課程の方に盛り込み、学校運営協議会から提言を行う。

福原校長

立川市民科の取り組みはとても体験的な活動で進められているので続けていこうと思うが例えば、立川にTGG（東京グローバルゲートウェイ）ができました。高学年が行って体験できるのですが、すべて英語で職業体験のようなことができる。今まで習ってきたことを実践する場面が設定されるわけですが、これまで立川市は６年生で全ての学校でやりましょうと取り組んでいます。この上砂川小も６年生がTGGへ行って体験します。来年度６年生と５年生でTGGの体験をさせてあげたいと考えています。これまで３、４年生で行ってきた学習を使うことで、今まで勉強してきたことが使える。さらに学習しないとできないだなと感じること６年生で一生懸命取り組むそういう意味の学習意欲を高めるような取り組みというものをしていっていいのではないかと考えてみました。

福永委員

基本的な方針として算数というのは非常にこれから中学校へ上がっていくときに大事ですが、教科的に力を入れたいのは算数と国語と、他に何かありますか。

福原校長

算数はもちろんです。教科としてよりは、それぞれの教科で学ぶ意欲をあげてあげたい。なぜ学ばなければならないのか。というようなところ。しっかり実感させてあげたほうが良いのだと思う。

齋藤副校長

方向性についてはこのような感じで。あとは算数の習熟度展開というところについては、低学年は分けきれないところがある。担任が学習状況を鑑み、必要だなというお子さんを数人ずつクラスから抜いてその子たちを持ち上げるような展開も考えなければならない。長谷川委員長がおっしゃったように学力の差は低学年では難しいのですが、足し算や引き算を考えたときに子供たちの様子を見ていると引き算でつまづいているお子さんは数人いると思う。その数人を各クラスから例えば3人ずつくらい抜いて10人くらい習熟度で展開し、そこに一人先生を配置して授業を行うことで低学年の学習内容を重点的に身に付けさせることができるという方法もある。

福永委員

学力別の学校の評価を提示してもらったことがあるがその中で算数というのは習熟度授業というのも含めて成果が出ているということになると思う。他の教科はどうなっているのか。気になるのは国語とか。国語の習熟度別は難しいと思うが。

齋藤副校長

国語については、低学年だと300時間、一日2時間程度の計算になる。一日2時間の国語を分割して行ったときに教える進度いうところも先生方によって差異も出てくるでしょうし、みんなが同じタイミングでここまでと終わられるかも難しい。読み取りの速度であったり、書くスピードであったりなかなか国語を少人数化するのには難しいと思う。

福原校長

文字の認識、聞く、見るは個々様々。そこを取り組んでいく方法をしていかない限りは国語のこれまでの指導方法をやっても子供には身についていけないと思う。

福永委員

今まで何十年とかけてやってきていますが、算数は答えがあるが、国語は答えが一つではなく、中学、高校になって国語力を高める表現力や語彙ボキャブラリーを広げるというのは中々難しい。そういった素養がないと。そうすると本を読ませるとかしかなくなっていくのかと思います。国語の学力状況は今どの程度なのかというのはどうですか。

福原校長先生

国語は6年生のみ全国学力状況調査を行っている。

・一人一人に応じた指導体制の提言

福原校長

不登校対策については効果検証したところ、増えもせず減りもせずというところなんです。様々な取り組みを行いました。が学校へ復帰というところまでは至らなかった。ただ、多少成果として見られたのは、担任あるいは学校との絶やさない連絡であったりとかそういうところで少し学校に放課後来て図工とかやってみようかなというような子がいたり、ということが多少の成果としてみられたかなというところなんです。

長谷川委員長

学力の向上の取り組みをしている中でこの子たちの学力面の対策はされているのですか

福原校長

学習のサポートという意味ではリモートの学習を実施したり、担任が学習課題を提供したりして、それをフィードバックさせてというようなこと、学習の芽を絶やさないということが続けているところなんです。

齋藤副校長

学校にこれた時に担任が空いている時間に個別に対応して課題をやっているクラスもあります。それによって安心して授業に参加できたという話も聞く。一人一人に合わせてやるしかないがそういう取組をしているクラスもある。

長谷川委員長

普段はリモートで学習する機会があればその時間はそういうところでやると。普通の児童と同じような時間軸で家庭において学習しているということではないのですね。やっていない部分の学力の低下というか、習得が少ないということですね。

齋藤副校長

リモートの授業には保護者の皆様も慣れてきた。欠席したときにリモートでお願いしますという連絡があって、リモート授業を提供できる。学級によっては体育の授業も見てたりとかそういうところで補充できる取り組み。子供たちもリモート授業に慣れてきているので向こう側から発言するなど、効果は上がっている部分はある。目の前で見ていないのでつまづいているところをピンポイントで指導できているかといわれればそこは課題がある。

長谷川委員長

人と接することが苦手だという子がリモートでも学習を通して能力が維持できれば良いと思うので工夫して勉強っていいな、面白いなと思えれば学校にいつか復帰できるかもしれません。チャンスを作ってもらえればありがたいと思います。

福永委員

学校としては、学校に来てもらいたいのか、教育水準を落としたいということを目的とするのかどちらなのか、両方なのか。まずは学校に登校して欲しいのか、個別にみた場合学校で教育できない分レベルが落ちてしまった。長谷川さんが言ったように色々な方法があるが学校に来て学校生活をやってもらいたいと考えている場合には受け入れ側が先生や大人ではなくてクラスの子供たちがどうやって受け入れてくれるのかというのを不安になるのではないのか。私は小学校6年生まで虚弱体質だったので季節替わりごとに月の半分いけなかった。そうすると行ったときに周りからどんな目で見られるのかなあとかが一番気になった。勉強のことは気にしていなかった。周りから休めていいなあとと言われるんじゃないかというのがあった。子供たちの受け入れ側の指導ではないがこういうことで出てくるよということは伝わっている。受け入れる子供たちが優しく迎え入れられるような雰囲気があると違うのではと思う

福原校長

学校側で休んでいる子供の学習の保証ができれば一番良いと考えている。学校に来てもらうことが目的ではない。ただ今のシステムでは教員の仕事の範囲外のところで子供たちの学習を保証させることはできないので、学校に来てという話になってしまう。そこが家庭とも連携してちゃんとした保証ができていけば何も学校に来る必要はない。そこができていないからどうしようかなと悩んでいるところだと思う。

現状は維持しなければならないが新たに不登校や不適応の児童を出していくわけにはいかない。そのためにどういう取り組みを行っていくのか。と考えるしかないと思っている。

クラスによって指導の差があってはいけない。子供が先生に合わせるのではなく、先生が子供の様子に合わせていくことが根本になければいけないのかなと思っている。

今年の教育課程にも書かれていますが、上砂川スタンダードこれをしっかりみんなが取り組めるように見直して全クラス、全校でやったらいいのではないかなと思う。上砂川スタンダード、立川スタンダードを授業の中で最低限取り組んでいこうという内容が書かれている。例えば、授業の始まりには挨拶をしましょうとか、授業の準備をちゃんとさせましょうとか、手をあげて発言するときにはしっかり立ちましょう。などの基本的なことが書いてある。それを上砂川小バージョンに落としたものがある。これが実効性のあるものなのかどうか見直してみんなでここは揃えてやっていこうということをやっているというのではないかなというのが一つです。もう一つは子供たちには不得意な面というものがあるって黒板を写すのが苦手、聞くことが苦手、友達と会話することが苦手、選択することが苦手など色々あるのでそれは子供の認知機能の差というものがある。文科省の調査で8.8%の児童が発達障害を抱えているというデー

タもある。発達障害だからということではなくて、苦手さがあるということ認識してそれを穴埋めしていく方法を考えなくてはならない。そのために認知機能を高めるトレーニングをする必要がある。認知機能を高めるドリルがあったりするのでそれを続けてやっていくことで回復していくデータもあるので教育課程に盛り込んでみました。

齋藤副校長

立川スタンダードの項目を受けて上砂川小は12項目まで絞っています。これを実効性のあるものにして授業の標準化を図っていく。経験のある先生に習った子供とそうではない先生に習ったこともで学力に差が出てくるのは避けなければいけない。ベテランの良さと若手の良さをうまく融合できるような形で検討できればと思っている。

福永委員

相手の話していることや本を読んだ文字からの理解を深め、適切な答えを返せるようにしているかどうかなど表現力を高めていく必要がある。

齋藤副校長

子供たちも多様化しているので、目から入ってくる情報が苦手子もいれば耳から入ってくる情報が苦手な子もいる。色々な認知の仕方をしているのでそこをトレーニングしていくことで少しでも子供たちが聞いたことや見たことが理解できればなという取り組みを行う必要がある。

市村主幹教諭

国語のことが出たので思っていることを少し。子供達、若者の間で「やばい」という言葉よくでます。ガラス割っちゃった、やばい。ラーメン食べてこれやばくね、おいしいよねという言葉もやばいと表現する。そもそも割れてしまった。困ったな。おいしい。うれしい。もやばい。意味は分かるし、文句をつけるわけではないけれども一つの言葉もたくさんの使い方をすると例えば多様性と考えても良いが、日本語はもっと言語が細分化されていて様々表現があったはず。けど今は全部一緒くたになっている。国語の言葉とか言語といったときに通じないよねと思う。子供だから通じないのか、今の社会の文化が全部まとめてしまって大雑把にというところが整えられないといけないのか若者の言葉を聞いているとこうじゃないのと丁寧に教えていくと別に大して変わらないからよくね、みたいな感じでめんどくさがる。だから算数の細かい違いが判らないところにもつながっていると思う時もある。高学年でも言葉のボキャブラリーを知らない子が多いと感じている

福永委員

家庭や学校の外ではそういう世界で通用してしまう。学校の中だけではそこでやばいといった場合何がやばいのくらは言って少しずつ言葉のボキャブラリーを広げてあげるしか語彙力を伸ばしていくことができないのではないかな。小中学生くらいで伸ばしていかないとそこから応用になっていくのでやばいで集約されてしまうと心配になってくる。小学校の授業の中で何かできないのかなという気はします。

齋藤副校長

言語環境については教員も気を付けなければいけないので、教員の言葉を聞いて子度は育つのでご家庭の言葉を聞いて子供は育ってくるので親御さんへの啓発もしながら環境を整えなければいけないと思っています。

・教員のワークライフバランスについて

福原校長

先生達が元気でないと子供たちも元気にならないので、そこが重要だと考えて一つの柱とさせていただいています。成果としては ICT 機器を活用したことでお休みの子と頻繁に連絡が取れたり、授業の中で効果的に活用できたりということで、先生たちの業務のスリム化に結びついている部分があるのかなと思います。提言ですが平日の余裕ある時間を設定したほうが良いだろうということで、増えている時間数を逆に減らすことで何とか平日に余裕を持たせたいのではと考えています。具体的に水曜日は4時間、金曜日は5時間とする。減ってしまった分は少し夏休みを後ろに伸ばしてということで、子供たちにも余裕を持たせることができるのではと考えている。また、組織を改善して会議の時間を削減する取り組みを行ってはどうかということで、今までは様々な部会があって会議をしていましたがこ

れをなんとか一回で収められるような組織にしたらいいのではないかと考えました。大きな柱が 3 つありますが一回の会議で終わるように削減するような取り組みをしていけたらよい。

福永委員

実際に教職員の方々の勤務時間はどのくらいなのか。

齋藤副校長

昨年度と比べると超過勤務は 10 時間以上減っている。SSS さんを 2 名配置していることで教員の印刷物とかでできるだけやってもらっている。6 時間目まである教員はどうしても遅くなってしまうが、その分何とか緩和できるようにということで、平均値的には 10 時間強位は減っている。

市村先生

日々の業務は基本的に変わらないが今年大きく変わったのは、通知表の 1, 2 学期の所見がなくなったこと。時間がかかる為、授業準備にあてることができた。

福原校長

通知表の所見をなくす目的は先生たちの業務軽減ではない。上砂川小学校では夏休みに個人面談行っている。保護者の方とお話をして、1 学期の頑張り 2 学期はこういうことをがんばっていきましょうという面談を行っている 3 学期の終わりに、1 年間のまとめをしっかりとお知らせしようということで 1.2 学期の所見をなくしたという経緯がある。その分先生が他の学習の評価等に力が注げる時間ができたというのは非常に成果があったと思う。

齋藤副校長

今回の協議を踏まえた提言案を学校運営協議会で作成していく。

4 教育課程について

福原校長

次回までに何かありましたらご意見を頂けたらありがたいと思い。これをもって 2 月の説明会にいどめればなと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

5 地域学校協働本部事業予算案について

・立川市民科

様々な事業行っていますので基本的にこちらは報償費を多めにとっています。豊泉さん、梅田園さん、萩本さんなど様々な方をお呼びしています。ほんとに少ないですが今年度も他の事業等でもお招きしています。また地区からもお呼びしています。

・むさびプロジェクト

例年行っている階段のカメなど武蔵野美術大学と連携して行っています。大学生なのでボランティアです。使用する材料費を計上しています。

・上砂川小環境美化プロジェクト

基本的には校庭の花壇の整備を行っています。今までは「おはなちゃん」という保護者のボランティア団体が行っていたが、活動が難しくなってきたので地域の方にボランティアを呼び掛けて行っている。コロナ化もあり人を呼んでということが難しかったのですが次年度はもう少し地域の方とやってくれば、学校の花壇も整備していけるかなと思う。

・助産師の事業

地域にお住いの助産師の方をお招きして命の事業を実施する。。

保護者の方にも授業を公開できればと思っています。

・クラブ活動

和太鼓、サイエンスクラブにおいて専門性の必要なクラブに講師を招いて実施する。